



Handwritten Chinese characters in cursive script on aged paper. The characters are '福' (Fú) and '壽' (Shòu), which together mean 'longevity and good fortune'. The paper is yellowed and shows signs of wear, including a vertical crease and some staining.





天明五

乙巳歳

え目

とまよりねまう角迄  
うりつるいまのけんあま

種松庵

近しるみやまの

一歩より

第一坊

な  
うま

常への西屋解し

道化のきとるま

後まわ

まきんうめ

まう

ま

目

あまのま

定春  
女  
岩

あまのま

あまのま

相

あまのま

女  
泉之

あまのま

学書

あまのま

白根  
書海

あまのま

女  
あま

あまのま



あやや門も音ふるに色 能雅

空きや月も心もほろり 如常

松の影もささげぬれ 如常

路りもほろりて 如常

いふもささげぬれ 如常

あやや月も音ふるに色 如常

むねもほろりて 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

あやや月も音ふるに色 如常

「吾く」の梅り昔も一四のま  
危好

いさふおれあて 送世人 猶解り

えふやのし傍もゆりや 義子代も  
路地

縁もよてうもほし 一平用を

まよふやほのく 四方のめり  
まは

「我れ」の自らし 梅むむね

物やけしもなふ ぬいさ  
其布

「の」よりとて 解きよふのほ

おめのおも進も ち霧も降も  
平伝

さうもふとよふと 一もまを唇

梅もほしとよふと 一もまを唇  
馬系

信ももきとよふと 一もまを唇

屋の擡のまやま ち不危のまも  
色流

梅の連の解も 梅もほしとよふと

又梅やちの ぬきの味てふん  
新平

梅さくやうう ちつひれと一用を

おやちの 一もぬき け舞  
吾梅

縁掃のあらん ちつひれと一用を

懸梅もやまぬき ちつひれと一用を  
枝糸

ちも梅てくれぬき ちつひれと一用を

何よりせらるる ちつひれと一用を  
柳尔

「ま」とけらる ちつひれと一用を

書向しむうふ ぬきと一用を  
不償

「まぬ」たとと ちつひれと一用を

「まぬ」たとと ちつひれと一用を  
自傷

「まぬ」たとと ちつひれと一用を

「まぬ」たとと ちつひれと一用を  
難得

「まぬ」たとと ちつひれと一用を

了あふはささくまのぐりや先 新あ

くいの様とちうんの吉もあふはささく

掃おやあめの村とち掃おー 巳声

掃りふやふれけなまもまの吉

上下のよくうもよーいさのま 夫勇改 新あ

縁掃くうんもやあまのけん

お新やあまもくともうやふ 夫勇改 新あ

くいの用もまふまてい調ひぬ

まふうらまああははゆし書先娘ー 一龍

くいの歌ほし新ん世も我も

帳掃やまぐ坊の娘の娘 新あ

掃くくいの用もまふまてい調ひぬ

わくくやあまもくともうやふ 夫勇改 新あ

けまやまもくともうやふ

古くぬくあのおのうらやむのま 重信

けまのうらまをいれま

まるとははを掃おあまもく おまき 新あ

まるとははを掃おあまもく

まるとははを掃おあまもく 新あ

まるとははを掃おあまもく

まるとははを掃おあまもく 志英

まるとははを掃おあまもく

まるとははを掃おあまもく 新あ

まるとははを掃おあまもく

まるとははを掃おあまもく 新あ

まるとははを掃おあまもく

まるとははを掃おあまもく 可定

まるとははを掃おあまもく

草のやももつ方のやうにあら 其後

えとくより持たることとて用之 一

万葉よいにあらうもすれども 信知

はつとて我してこそとてその坂 一

よふちやあひてこそおのり 一

縁わかやもよふことの新しい信 一

おのちねの朝も親のちも 一

たたまうそのえきとのむ様 一

とたれふ様よりあらぬ 一

一つははてはておのふ事の用 一

川へてそをきりておのの心 一

まにまにのあはれよもあはれよのま 一

あふちやとそよよのま 一

おののまのふにこそまのまのま 一

月やこころやつかのりめいおまをま 一

園へけむらひてこころやまの用 一

あふちやうろもておのれま 一

つたへておのれとまはれりてまのめ 一

かひたりておのれも伸りては連は情 一

ゆきおのれもともあけりてまの用 一

あふちやおのれはわやあまのま 一

おのれちや外もまのまのまのま 一

あふちのまのまのまのまのまのま 一

あふちのまのまのまのまのまのま 一

あふちのまのまのまのまのまのま 一

あふちのまのまのまのまのまのま 一

あふちのまのまのまのまのまのま 一

あふちのまのまのまのまのまのま 一

一改

止息

川

志

くしんれやまの威儀も喜むよ 水

程の上徳ももよよとて

勇一上松の家や門のちね 海

そのまふ世話ふぶふいふのま

吹おしはぶらふし 加友

梅咲て氣ももよよとて

花一上松の行ふるわりりめ 鳥

松よりまよしりあまはつらん

まよる中一入まれ色ももよ 志

きのーこのまはつらん用意

是ハ氣ももよよとて 加

そのまよしりあまはつらん

えりやまもはつらん新し 梅之

言話一上松のまよるのま

まよる中一入まれ色ももよ 水

浄土信の程ももよよとて

一万葉や古のまよるのま

梅ももよよとてもよよとて

言話一上松のまよるのま 言

書ももよよとてもよよとて

何とてもよよとてもよよとて 二

言話一上松のまよるのま 以

ありてもよよとてもよよとて

やれ恩のまよるのま

ありてもよよとてもよよとて

よや話のまよるのま 呂

ありてもよよとてもよよとて

ありてもよよとてもよよとて

しんすーさあふりふねと叶 祝治  
ふんお保とてふ年のねんあ保あ

おまふちやあふりふねとて  
あふりふねとて

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 喰治

あふりふねとて  
あふりふねとて

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 備山連 敬亭

あふりふねとて  
あふりふねとて

あふりふねとて  
あふりふねとて

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 夏月

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 如月

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 味夕

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 備山連 高流

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 名外

あふりふねとてふ年のねんあ保あ

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 名外

あふりふねとてふ年のねんあ保あ 名外



也生

ゆり門の扉のまもるおれ者

快也

山里やさきやまを登りし

之崎改  
作非

縁をゆく縁をゆくやまをれし

羽翠羽

松風の音ふつふと聞えてきお

仙里

群を登りしやまを登りし市の事

はは連  
まま若

ふらふらやまを登りしあやうせ

かきかき  
ふきふき  
うきうき

いさかきやまを登りしきの事

えりや又登りしきの事

庭園

ゆりあふ車力もかきかき

不元

ゆりあふ車力もかきかき

まふ

ゆりあふ車力もかきかき

明也

ゆりあふ車力もかきかき

まふ

ゆりあふ車力もかきかき

雨雀

ゆりあふ車力もかきかき

ひん

ゆりあふ車力もかきかき

ひん

新くや母のほろとさきりし  
ふらわらふしほりや蘇子延  
居るて預ふおやち福系  
ふらわらふしほりやちの梅

丁君上の  
やわらうしや

遠きとこ中よりおれおれ  
末有

市近しほりおれく蘇の吉

果のおし又砂のほり居る梅  
其<sup>女</sup>桃

おまけし女く紙おれおれ  
喜柳

おれおれおれくの代れ吉

おれおれおれくおれおれ  
菊生

おれおれおれくおれおれ

おれおれおれくおれおれ

おれおれおれくおれおれ  
梅也

おれおれおれくおれおれ

おれおれおれく  
おれおれおれく

おれおれおれくおれおれ  
町小

おれおれおれくおれおれ

おれおれおれくおれおれ  
先秋

おれおれおれくおれおれ

おれおれおれくおれおれ  
芳枝

おれおれおれくおれおれ

おれおれおれくおれおれ  
厚水

おれおれおれくおれおれ

おれおれおれくおれおれ  
厚枝

おれおれおれくおれおれ  
梅也

思くし悟ちし柳舟よも  
あつたつたあめり花よこし

ささねと月やしらさよしらさるる

梔言

事とらふて世のまはるまはるの  
ほこもゆれりあつた

花よゆせか

その命よろくくあほをさる方柳

あつたよけられてさしやうあつた

今  
以  
因

えーと思はれまはれとちて

紫よよ中様も拂りてあつた

平家頼のゆきよゆきあつた

号  
笛

あつたあつたあつたあつたあつた

えー百すちとちあつた

蚊  
子

世治りもあつたあつたあつた

新のあつたあつたあつたあつた

茶  
花

あつたあつたあつたあつたあつた

こころを思ふあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

水  
流

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

骨  
水

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

文  
海

あつたあつたあつたあつたあつた

太  
田  
子  
山

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

一  
入

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あ  
汁  
あ

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

名水やそて海もよや〜 本ね

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

〜 〆

本ね

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

〆

あしおやまのやまといえぬ  
安田

徒らふるまふくつやうの坂

山里も梅の香もよき遠くより  
可也

あめあめあめあめあめあめあめ

吾皇

あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ

行く行くあそびて風の御心  
骨水

あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ

あしおやまのやまといえぬ  
芦碧

あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ

陽をや傍の下まをる小るる  
芳茂

あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ

あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ

あしおやまのやまといえぬ  
風成

あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ  
あしおやまのやまといえぬ

其言

あしおやまのやまといえぬ

あしおやまのやまといえぬ  
一

あしおやまのやまといえぬ  
于此

あしおやまのやまといえぬ  
素白

あしおやまのやまといえぬ  
外石

あしおやまのやまといえぬ  
号笛

あしおやまのやまといえぬ  
草む

あしおやまのやまといえぬ  
瘧夕

あしおやまのやまといえぬ  
厚強

あしおやまのやまといえぬ  
一

心一もくを虚のいさめを 所遊  
 聖殿 匠者のいしむては 毛後  
 名うしあふまの所も宇治郡 吟詠  
 りねし軍を中ましのみ 可定  
 年修くまふ女十の口けく 系舟  
 隣むしむき 温泉の客 細水  
 再興の客より交りて 宇治 杉宇  
 幾代おのろくん堂の音れ 流ぬ  
 蘇のまもかーいや川て月の興 電踏  
 まも和その意 吟詠 阿白  
 けらねと寝いけをわめて 梶言  
 千石船一二十石船 如神  
 ら若くしむの雇えれを月夜 赤有  
 ねふ遠江の音はねく 毛後

名後交行

握事の流し  
 二一と年まで

流れてくるおまの流す 于跳

解さし推交しをいねい

行をや十息よはいさよ一画

うわらうまらふまはしと  
 鳴じし一折しぬ振三男以  
 もうけて振しむるまの  
 目とまのーしー

子室の係分 浪やまの音 其書

今昔の友はよ  
 竹を合はれ除あを年して

きの外らまふ一舟よ年の雲

the first volume of the work

the second volume of the work

the third volume of the work

the fourth volume of the work

the fifth volume of the work

the sixth volume of the work

the seventh volume of the work

the eighth volume of the work

7

1

○平成十一年十月十日 松本の佛文書学会  
全国大会の際、大田初夫氏より賜りし。  
雲英本雄記

